

総説特集 素材のおいしさを科学する - 7

酒のおいしさ—古典からさぐる—*

一島 英治**

(創価大学工学部生命情報工学科)

「酒のおいしさ」は五感をとおして感性に訴えるものです。脳に伝達された感覚は日本語という言語によりその感覚は表現されます。本稿は、日本語の特性、日本語の「サクラ」が日本人に与える影響、酒は神の憑代^{よりしろ}、感性に訴える酒、神代に探る日本の酒、万葉集の酒を讃むる歌^ほ 13首、芭蕉と酒、良寛と酒、橘曙覧^{たちばなのあけみ}の歌、酒と人生、そして、まとめからなります。酒のおいしさは、ものづくりの人の心、あじわう人の心、理性による克己心、の三点の重なったところに最も効果を発揮すると思います。

キーワード：酒、酒のおいしさ、酒と古典、酒は神の憑代^{よりしろ}、日本語

はじめに

「おいしい」とは、どのようなことをさすのでしょうか。岩波の『広辞苑』¹⁾によると、

「いしい」に接頭語「お」が付いてできた。美味である。▷うまいより上品な語。浮世床ニ「なんぞ一・い物がございますなら」。「一・いお菓子」「一・い語」

とあります。「美味」いうことについて、万葉集の歌があります。

飯喫騰 味母不在 難行往 安久毛不有
赤根佐須 君之情志 忘可弥津藻

万葉集・巻16 巻一 3857

万葉がなは、中西 進『万葉集—全訳注原文付(4)』²⁾より引用しました。これを、佐佐木信綱編『新訂新訓 万葉集 下巻』³⁾による翻訳では、次のようになります。

飯喫めど 甘くもあらず
行き往けど 安くもあらず あかねさす
君が情し 忘れかねつも

佐為王の近習の婢が、宿直で頻りに夫に会えない日が続いていたときのことでした。当直の夜に夫の夢をみ、夫が側に居ないことからむせび泣きをし、声

高に歌った歌が先の一首でした。王はこのことを聞き、心をいため永く当直を免除したということです。

この歌では、「甘くもあらず」を万葉がなで「味母不在」と使っています。今日の「おふくろの味」に通じる感覚は、万葉集の時代に「味母」という文字として使われていました。万葉がなは「味母もあらず不在」と読むのでしょうか、それとも、「味母不在」と読むのでしょうか。

ところで、酒のおいしさは、どのようにしてもたらされるのでしょうか。なかなか難しい問題ですが、ここでは古典の中に探ってみることにします。酒のおいしさを古典の中に探る前に、おいしさの感覚を表現する日本語の特性と、日本語「サクラ」が日本人の感性に与えてきた影響についてすこし考えて見ます。

1. 日本語の特性

日本語について、言語学的に詳細な研究をまとめた服部四郎著『日本語の系統』⁴⁾によると、日本語の系統は今なお霞みにつつまれているとのことで、日本語は近隣諸国で用いられている言語とは系統的に異なるといわれています。

* Received May 20, 2005; Accepted June 23, 2005.

How wonderful, happy and delicious tastes and flavors of the Japanese sake transmitted and described in ancient and old literatures

** Eiji Ichishima: Department of Bioinformatics, Faculty of Engineering, Soka University, Tangi-cho 1-236, Hachioji-shi, Tokyo 192-8577, Japan; ichishima@t.soka.ac.jp; Fax +81-426-91-2741

いっぽう、国語学者の大野 晋教授は『日本語以前』⁵⁾、『日本語の起源 新版』⁶⁾の中で、はるか彼方、南インドとスリランカのタミル文明と言語が、遠い遠い歴史以前の日本のある時期の文明および言語と、祖先をおなじくしているのではないかという壮大な仮説を提出しています。大野 晋先生はさらに、近著『弥生文明と南インド』⁷⁾の中で、

日本から 7000km も離れた南インドの文明が 3000 年も前に日本に到来し、弥生時代という新しい文明の時代を開く原動力となった。それに伴って古代タミル語が古い日本語にかぶさり、単語と文法とが受け入れられて、ここに一つのいわゆるクレオール語が成立した。

と述べています。ここでいう、

クレオール語 (注、*créole* (仏) , *Creole* (英)) とは、大航海時代に中央アメリカやアフリカに、ヨーロッパ文明が進出し、支配的勢力を及ぼしたとき、それに伴ってポルトガル語、スペイン語、英語などが各地に、始めは単語から、世代が進むにつれて文法まで現地の発音の仕方によって現地の人々にうけいれられ、もともとの現地の言葉とも、侵入したヨーロッパの言語そのものとも違う形に変形し定着した言語をいうものです。

医学を修め、古代のラテン語や古典ギリシャ語などに造詣が深く、大学で西洋古典学の教鞭をとっておいでの二宮陸雄先生は、もう一つの印欧古典語であるサンスクリット語の世界に踏み込んでいたところ、『古事記』に出会い、古事記の神代編にはサンスクリットの語感をもつ語が多いことに気がつき、古事記の中にサンスクリット語で読み解く宇宙精神継承の壮大な構図を見出しました。その成果は、『古事記の真実—神代編の梵語解』⁸⁾なる大著として出版されました。たとえば、「美斗能麻具波比(ミトノマグハビ)」は、梵語辞典によると、*mithuna* (ペアの。一対を成した。女と男のペア。ペアをなすこと。性交)、*makha* (楽しい。快活な。祭り。快楽や祝いのある機会<場合>。供犠) からできた合成語 *mithunomakhah* (ミトウノマカヒ) で、「男女のペアの快楽行事 (ありは供犠)」、「性交の祭り」を意味しているのだそうです。

『古事記』⁹⁾の成立は、序文も本文も含めて和銅五年 (西暦 712) の作です。舎人姓は稗田、名は

阿禮、年は 28 の記憶していた歴史を、太安萬侶が、音訓を交えて記したものです。古事記は、日本で最も古い文学書、歴史書と位置付けられています。

ところが、東洋史学者の岡田英弘先生は『倭国—東アジア世界の中で—』¹⁰⁾、『倭国の時代』¹¹⁾のなかで、古事記は和銅五年の時代より約 100 年後の平安時代 (794-1185) の初期の作を偽ったものを、和銅 5 年 (西暦 712) の作としていたと論じています。いっぽう、歴史学者で古代史専攻の上田正昭氏は『藤原不比等』¹²⁾のなかで、古事記の序文のなりたちがいつか疑問がのこるにしても、和銅 5 年 (712) に撰上されたという古事記が平安時代に作られたものとは氏は考えないとあります。

斉明 7 年 (西暦 668 年) に、近江国滋賀の大津宮で即位式を挙げた天智天皇 (在位西暦紀元 668-671) はわが国で初の成文法典『近江令』22 巻を編纂し、670 年ないし 671 年に施行したといわれています。この近江令で、「日本」という国号が初めて採用されたと、岡田英弘氏は推定しています。氏は 670 年に新羅を訪問した阿曇連頼垂が日本国を名告った使節の最初であると述べています¹¹⁾。そして、『日本古代史事典』¹³⁾によると、唐王朝 (618-907) の正史である『唐書』『旧唐書』などの中国関係書、また『三国史記』(金富軾ら、1145) 「新羅本記」の海外資料に「日本国」が現れるのは 7 世紀末から 8 世紀初頭とあります。したがって、「倭」から「日本」という国号への変更は、天智天皇治世のことと推定されています。

2. 日本語の「サクラ」が日本人にあたる影響

サクラは日本を代表する花です。山田孝雄氏の名著『櫻史』¹⁴⁾のはしがきに、

櫻花はわが国民の性情の権化なり。わが櫻と同じき樹は外国になきにあらずといへどもわが国の花より麗はしく咲けるはなしとぞいふ。思へば国民の性情のこの花によりて薫花養成せられたること幾可なるべきか。後略

とあります。

難波津にさくやこの花冬ごもり 今は春べと咲くやこの花 王仁 (百濟からの帰化人)

古今集 (和歌集) の序にあるこの歌の「この花」は櫻花なるべし

と論ぜられる、と『櫻史』にあります。然るに往々梅とせる説もあるとのこととす。

たしかに、江戸時代末期の安政・天明期の詩人、江村北海 (1713-1788) の日本漢詩史『日本詩史』¹⁵⁾によると、「梅花の頌」に「難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」の和歌を指す、とあります。

わが国で、「はな」といえば、桜をさしてきました。桜の精は大山津見の神の女、名は神阿多都比売、亦の名は「木花之佐久夜毘売」です。春になると、山の神は里に降りて田の神になります。木花之佐久夜毘売は父の命でサクラの花に姿をかえてイネの精霊になります。花見はイネの収穫の占いでした。古代の人びとは、春の一日、酒肴を用意しサクラの木の下で、花に祈りつつ一時をすごしました。これが、花見の原型です。

日本の正史である『日本書紀』¹⁶⁾は舎人親王らの撰により養老4年 (720) に、神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話です。天孫・天津彦穗瓊杵尊にみそめられた木花開耶姫は、天孫の子を一夜にて孕みました。天孫から「抑吾が児の非ざるか」と疑われました。姫は甚だ慙恨じ、無戸室を作り、「天孫の子ならば、必ず当に全くなきたまへ」その室の中に火をつけ室を焚きました。この中で、三皇子が無事に誕生しました。

さらに、日本書紀¹⁶⁾の一書 [第三] に曰く、と神吾田鹿葦津姫 (=木花開耶姫) は「狭名田の稲以て、天甜酒を醸みて嘗」とあります。

この酒は、和名抄、飲食部によると、「醴酒」とあるものです。和名抄に「一日一宿酒也」とありますので、醴酒はいわゆる一夜酒と言われるものです。

渡部昇一著『日本語のこころ』¹⁷⁾に、次の言葉があります。

別の言葉でいえば、日本人は日本語のなかに生まれるのであって、単に意思伝達の具として日本語を学ぶのではないのである。われわれは自然界にある桜花の美がわかる前に、日本語の中にまず桜花の美を見るのだ。紀友則をはじめとする無数の詩歌の中に、桜の散りゆく花びらの美をあらかじめ見ていたからこそ、自然の中にある山桜、つまり学名で言えば「プルヌス・セルラタ・スポンタエア、*Prunus serrulata* Lindl. subsp. *spontanea* Makino」という植物を美しいと

感じ、散りゆく花びらに感銘を受けるのである。この文章は、日本語の「サクラ」が日本人の感性にあたえている影響を極めて適切に表現していると思います。

3. 酒は神の憑代

古代の日本人と酒の関わりについて、中国正史のうち三世紀の『三国史』のひとつ「魏志」巻30・東夷人・倭人、通称「魏志」倭人伝 (石原道博 編訳『新訂 魏志倭人伝 他三篇』)¹⁸⁾にあります。

始め死するや停喪十余日、時に当りて肉を食わず、喪主哭泣し他人について歌舞飲酒す。

その会同・座起には、父子男女別なし。人性酒を嗜む。

大人の敬する所をみれば、ただ手を博ち以て跪拜に当つ。その人寿考、あるいは百年、あるいは八、九十年。後略

3世紀の『魏志倭人伝』¹⁸⁾の記録は、日本の酒に関する最も古い記録です。そして、倭の人びとの長命のさまが記録されています。

和銅6年 (713)、元明天皇の詔によってつくられた『風土記』¹⁹⁾のうち、常陸の国司から太政官 (または民部省) に提出された「常陸風土記」によると、当時の人びとの酒を飲み歌舞にふけるさまが、次のように記されています。

また、毎年四月十日には、お祭をして酒宴をひらく。卜部氏 (神祇官に属して卜占を職とするもの。中臣の雷臣から出たという。) の同族の人たちは男も女もみな集会し、日々夜々酒を飲んで歌舞の楽しみにふける。そのうたう歌にいう。

あかさかの (あたらしいの意、新しく醸した酒を讃えて) 神のみ酒を

飲と 言いけばかもよ

我が酔いにけむ

古代の日本人が嗜んだ酒は、どのようなものであったのでしょうか。『風土記』のうちの「大隈国風土記」逸文に次の文があります²⁰⁾。

大隈ノ国ニハ、一家ニ水ト米トヲマウケテ、村ニツゲメグラセバ、男女一所ニアツマリテ、米ヲカミテ、サカブネニハキイレテ、チリく (ジリ) ニカヘリヌ、酒ノ香ノイデクルトキ、又アツマリテ、カミテハキイレシモノドモ、

コレヲノム・・・

この酒は、口嚼くちかみの（嚼さげ）酒です。口嚼（嚼）酒は東南アジア系の非漢民族である越人によって稲作とともに南方系の狩猟、採取、漁労文化に伴って古代日本に渡来した酒造りの方式としてとらえられています。

じつは、口嚼（嚼）酒のつくり方は、沖縄の石垣島に今も伝わっています。昭和51年（1976）に自らの体験を語った宮城文さんの「嚼神酒カンミシ」により、硬く炊いた飯とその一割相当の生の米粉をかみ、つばで自然発酵させたということです。「ミシカン人（ピイトウ）」（本土でいう造酒童子さかづこ）は歯の丈夫な妙齢の女が選ばれたということです。酒つくりで有名な元醸造試験所所長の秋山裕一博士によりますと、この嚼神酒の造り方は、かむところを除くと、日本伝来の酒母である「水酏みずもと」の造り方に似ているということです。この際に、生米を入れると必ず酵母菌が生えてくるといわれています。米と相性の良い酵母のなかに、酒造りに適するアルコール発酵能の強い酵母が住んでいるのかもしれませんが。この記録は醸造学分野の専門雑誌、「日本醸造協会誌」、71巻²¹⁾に記録されています。

和銅6年（713）に編集された『播磨風土記』によると、神代に遡ってカビによって酒を醸したと推定されるくだりがあります。

大神の御糧みかれひ（乾・飯つ糰ぬ（注、ほしい（ホシイ）、ほしいの約））沾ぬれて糰かび生えき、すなはち酒を醸かもしめて、庭酒にわきに献たてまつりて宴うたげしき

米飯めしにカビが生えたものは、古く「加無太知かむたち」または「加牟多知かむたち」と呼ばれました。今の麴こうじである「御糧」がイネ（稲）であったことは、日本書紀¹⁶⁾の大山祇神の姫おほやまつみのかみ（木花開耶姫あめのたむさひ）の造った「天甜酒」が「狭名田」のイネ（稲）で醸されたことから察せられると坂口謹一郎先生はのべています²²⁾。

酒は昔から神がつくるもので、酒は「神の憑代よりしろ」と考えられてきました²³⁾。憑代は依代とも書きます。神霊が招き寄せられて乗り移るものです。古代では酒は自家醸造でしたから、大変に貴重なもので、酒には魂が込められていると考えられていました。従って、酒の贈答は魂の贈答であったわけです。

なお、酒を贈るときは、肴さかなとして「のし鮓アワビ（鮓）」が添えられました。のし鮓は、アワビを薄切りにして乾燥させたものです。のし鮓は脇役であったので

すが、年が経るにつれ、のし鮓を贈れば酒をおくつたとされるようになりました。さらには、のし鮓が「熨斗のし」となり、そして簡単に「のし」となりました。簡略化とともに、自分の魂の一部を贈るという意識のほうも薄れてしまったということです。以上が「のし」の由来です²³⁾。

日本の人は「サクラ」に感じる様に、酒という言葉を見聞きすると、古代から伝えられた「酒は神の憑代よりしろ」という感覚が体の中に湧きでてきて、酒はおいしという感じの前期の状態になるようにも思えるのですが、いかがでしょうか。

江戸時代の風狂の禪師、一休宗純(1394-1481)は、
極楽を何処の方と人間はば

杉の葉立てる又六が門 一休

と、杉の葉を束ねて球状にし軒にかけて酒屋の看板とした「酒林さかばやし」を歌によみ、極楽は酒屋にあると喝破しました。杉の葉を束ね球状にした酒林はなぜ酒屋を意味するようになったのかは、奈良の三輪山の大神神社が酒の神とされ、杉を神木としていることからきているのです。

4. 感性に訴える酒

酒は視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などの五感に訴えます²⁴⁻²⁶⁾。酒の中の酔いをもたらす本体は、エタノールです。エタノールは血中濃度100ml当り50mgになると、脳の中樞神経は酔いを感じます。大脳生理学的にはエタノールは古い皮質を開放する役割を果たし、ストレスからの開放をもたらします²⁷⁾。田中潔先生の『アルコール長寿法—晩酌のすすめ—』²⁷⁾があります。酒の歴史は古く、ビールの酒神オシリス（Osiris（ラテン））、ワインの酒神ディオニュソス²⁸⁾（Dionysus）（バックス、Bacchus）、このはなのさくやびめ木花之佐久夜毘売などの酒神が知られています。中国の贅沢三昧²⁹⁾に、皇帝の贅沢と精神の蕩尽がありますが、いずれにも酒は深くかかわります。前漢王朝をたおし（西暦紀元7年）、「新」王朝をひらいた王莽おうもう（紀元前45—後23）は経済政策についての詔みことりを出しました³⁰⁾。

夫塩は食肴の将、

酒は百薬の長、嘉会かかいの好なり。

鉄は田農の本にして、

名山大澤、饒衍の臧ない。 後略

その中の一節に、「酒は百薬の長 嘉会の好」の言

葉がありました。「酒は百薬の長」の語源です。王莽の新王朝は短命に終わりましたが、「酒は百薬の長」の言葉は名言として長く伝えられてきました。

お隣の中国の宋の時代の陶穀の詩集、「清異録」酒醬門にのっている「麴世界」は、酒の世界へのいざないをよくあらわしています。故青木正児氏の著書『中華飲酒詩選』³¹⁾の翻訳を紹介いたします。

麴世界

酒天は うつろ
 酒地は はるか
 酒国は やすらか
 君臣貴賤の差別無く
 財利を凶る要も無く
 刑罰を避ける要も無い。
 らくらくと やすやすと
 その楽しみは量りきれない。
 やがて飛蝶の群に入つて
 ただ もう、もやもやひろびろとして
 一何も覚えなくなる。

もう一篇、陶穀の「瓶蓋病—てうし さかづき のやまひ」という詩を紹介します。

酒ずきは朝となく晩となく 寒いにつけ暑いにつけ
 楽しいと云っては酔ひ
 愁へても酔ふ。
 閑だと云っては酔ひ
 忙しくても酔ふ。
 肴の有る無し
 酒の善し 悪し一切構はず。
 質入、無心、
 借金、掛け買ひ、一向平気で。
 日ごと飲み、飲めば酔うまで
 酔ふを厭はず、貧しきを悔いず、
 俗に銚子盃の病と名づける。
 本草薬物学書を片端から掲つても
 素問古代の医書を詳細に検べても
 此れに効く薬ばかりは出てゐない。

5. 神代に探る日本の酒

4世紀初頭に実在したことが確実視される崇神天皇は日本書紀に「御肇國(国)天皇」、古事記に「初國(国)知らしし御真木天皇、常陸風土記に「初國(国)所知美麻貴天皇」と呼ばれています。

日本の酒を神代に探ってみます³²⁻³⁴⁾。

日本書紀¹⁶⁾によると、崇神天皇8年の夏四月の庚子の朔乙卯(十六日)、高橋邑の人活人をもって、大神(大物主大神=大三輪の神の意)の掌酒(神に奉る酒を管掌する人)としました。

冬十二月の二十日に、天皇は大田田根子をもって、大神を祭らせました。この日に、活人は神酒を奉げて天皇に献上しました。そして次の歌を歌いました。

此の神酒は 我が神酒ならず 倭成す 大物主
 の醸みし神酒 幾久 幾久

幾久は、幾世まで久しく栄えよ栄えよと、いう意味です。

このようにして、神宮に宴をもちました。宴が終わって、諸大夫等は歌いました。

味酒 三輪の殿の 朝門にも 出でて行かな
 三輪の殿戸を

一晚中酒宴をして、三輪の社殿の朝開く戸口を通過して帰って行こう、という意味です。

天皇は

味酒 三輪の殿の 朝門にも 押し開かね
 三輪の殿門を

三輪の社殿の戸を、朝になってから押し開いてお帰りなさい、という意味です。

以上の歌謡は4世紀に実在したとされる崇神天皇の時の酒宴のさまを良く伝えていると思います。活人の歌は、主人側が酒をたたえて酒宴をはじめめる歌謡であり、諸大夫等の歌は客人が酒を賞す歌謡で、崇神天皇の歌は主人側の接待の歌謡です。日本の古代の酒宴の形式・作法を示しているもので、大変に興味深いものがあります。

応神天皇は4世紀後半から5世紀初頭に実在した可能性が高いと『日本古代史事典』³⁵⁾にある天皇で、他系からの入婿で崇神天皇の子孫の仲姫を妻として迎え皇統を継承したとされています。

古事記⁹⁾には、応神天皇が太子の時の宴のさまが描かれています。

太子が禊からもどるのを待っていた母、息長帯日売命(=神宮皇后)が、待つ人が無事に帰ることを祈り醸した酒を献上して歌をよみました。

この御酒は 我が御酒ならず 酒の司 常世に
 座す 石立たす 少名御神の 神寿き 寿き
 狂ほし 豊寿き 寿き廻し 献り来し御酒ぞ

乾さず食せ ささ

神宮皇后摂政13年、太子時代の応神のために開いた酒宴の歌謡でした。この歌にある「少名御神」とは、大国主神と協力し国造りに励んだ後に常世の郷に行ったと伝えられている少名毘古那神で神産巢日神の御子です。酒造りを教えたといわれています。

先の母の歌のあとで、建内宿禰が御子のために答えて歌った歌は、次の酒楽の歌（酒座歌）です。

この御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて 歌ひつつ 醸みけれかも 舞ひつつ 醸みけれかも この御酒の 御酒の あやにうた楽し ささ

応神天皇は、若い太子の時から母や建内宿禰の設けた宴の大御酒になじんだためか酒がすきであったようです。百濟からの酒造技術者である須須許理が大御酒を献上した酒で浮き浮きした気持ちを次の旋頭歌でよんでいます。

須須許理が 醸みし御酒に 我酔ひにけり
事無酒 笑酒に 我酔ひにけり

「事無酒」は無事平安な酒、「笑酒」は笑いをもよおす愉快的な酒の意です。

6. 万葉集の酒を讃むる歌 13 首

万葉集³⁶⁾には、酒の歌は数多くみられますが、なんとといってもその圧巻は奈良時代の歌人・太宰帥・大伴旅人(685-731)の酒を賛むる13首です。

駭なき物を思はずは一坏の濁れる酒をのむべくあるらし

(巻 3-338)

酒の名を聖と負せしいにしへの大き聖の言のよろしき

(巻 3-339)

いにしへの七の賢人どもも欲りせしものは酒にしあるらし

(巻 3-340)

賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣きするしまさりたるらし

(巻 3-341)

言はむすべせむすべ知らず極りて貴きものは酒にしあるらし

(巻 3-342)

なかなか人とあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ

(巻 3-343)

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む

(巻 3-344)

価無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも

(巻 3-345)

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも

(巻 3-346)

世の中の遊びの道にすずしきは酔泣するにあるべくあるらし

(巻 3-347)

今の代にし楽しくあらば来む生には蟲に鳥にも吾はなりなむ

(巻 3-348)

生者つひにも死ぬるものにしあれば今ある間は楽しくをあらな

(巻 3-349)

もだりおりて賢しらすは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり

(巻 3-350)

大伴旅人は大伴安麻呂の子孫で、代々宮廷を守ってきた生粋の貴族でしたが、60歳を越してから太宰帥として筑紫に赴任しました。赴任後まもなく愛妻を亡くしました。旅人の酒を賛むる歌には、望郷の思いと、妻を亡くした悲しさ、そして名門大伴家の没落といったやりきれなさが隠されています。

7. 芭蕉と酒

芭蕉(1644-1694)は元禄4年(1691)4月18日より5月4日まで、向井去来^{きやうらい}の別荘である京落柿舎^{らくししゃ}に滞在しました。その時の日記文学が『嵯峨日記』です。4月22日の条に次の言葉が出てきます³⁷⁾。

喪に居る者は悲をあるじとし
酒を飲ものは楽あるじとす

芭蕉の「閑居箴」という句に³⁸⁾、次のものがあります。

酒のめばいと々ねられぬよるの雪

芭蕉は『笈の小文』の中で、奈良県吉野郡竜門村にある瀧を次のようによんでいます³⁷⁾。

瀧(龍) 門
龍門の花や上戸の土産にせん
酒のみに語らんかゝる瀧の花
櫻

扇にて酒くむかげやちる櫻

芭蕉はいける口であったようです。門弟たちには次の教訓をたれています。

行脚掟

好で酒をのむべからず、

饗応により固辞しがたくとも、微醺にて

やむべし

行脚掟は、芭蕉が旅行の注意事項を十数ヶ条にまとめて記したものとして、江戸時代中期以降の諸俳書（俳句の本）に収録されています。しかし、芭蕉作という確証はありません。芭蕉の仮託の書としても興味深いものです³⁹⁾。

8. 良寛と酒

一所不住の乞食生活を続けた良寛は、宝暦8年(1758)に生まれたといわれ、天保2年(1831)に74歳で亡くなりました。良寛は酒を大変に愛した人でした⁴⁰⁻⁴²⁾。

そのかみは酒に浮ける梅の花土に落ちけりいたづらにして (36)

大御酒を三坏五つきたべ酔ひぬゑひての後は待たでつぎける (168)

あすよりの後のよすがはいざ知らず今日のひと日は酔ひにけらしも (182)

うま酒を飲み暮らしけりはらからの眉白妙に雪のふるまで (183)

百鳥の木伝うて鳴く今日しもぞ更にや飲まむ一つきの酒 (187)

さすたけの君がすすむるうま酒にわれ酔ひにけりその美酒に (188)

さすたけの君がすすむるうま酒を更にや飲まむその立ち酒を (189)

ちんばそに酒に山葵に給はるは春はさびしくあらせじとなり (197)

「ちんばそ」は神馬藻の音の訛りで、海藻の「ホンダワラ・ホダワラ・ナノリソ」です。

草のへに蛭となりて千年をも待たむ
妹が手ゆ黄金の水をたまふといはば
(旋頭歌 14)

常盤木のときはかきには君が祝つる
その豊御酒にわれ酔ひにけり
(旋頭歌 15)

新室のにひむろの祝き酒に我
酔ひにけりそのほぎ酒に (雑体歌 1)

良寛の酒は、解良栄重の『良寛禅師奇話』によると、師常に酒を好む。然りと雖も、量を超えて酔狂に至るを見ず。又田父野翁を言わず、銭を出し合ひて酒をかひ呑むことを好む。汝一盃吾一盃、その盃のかず、多なからしむ。

とあります。

9. 橘 曙覧の歌

幕末の歌人・国学者、橘 曙覧⁴³⁾ (1812-68) は清貧の暮らしのなかから、生活・社会・自然を自由奔放に詠み、近代短歌の先駆として高い評価を受けています。

酒 人

とくとくと 垂りくる酒の なりひさご
うれしき音を さする物かな (123)

独 楽 吟

たのしみは 雪ふるよさり 酒の糟
あぶりて食いて 火にあたる時 (571)

たのしみは とぼしきままに 人集め
酒飲め物を 食へといふ時 (580)

高 瀬 川 といふところへ
床に鳴く こほろぎ橋を 横に見て
酔ひ倒たる 寝ごちのよさ (635)

温めて ただ一めぐり さする酒
あかくなりたる 顔つきを見す (653)

10. 酒と人生

柳沢淇園著(天保14年(1843)刊行)、森 洗三校注『雲萍雑誌』⁴⁴⁾には、次の二つの方向からの酒に対する評価があります。

「飲酒の十徳」に、

1. 禮を正し、
2. 勞をいとひ、
3. 憂をわすれ、
4. 鬱をひらき、
5. 気をめぐらし、
6. 病をさけ、
7. 毒を解し、
8. 人と親しみ、
9. 縁をむすび、
10. 人壽を延ぶ。

「古人罰酒の法に」、

三合を飲酌の限りとす。もしこの法を失ふ時は、家を乱し身を亡す。

箕子〔殷の紂王の叔父〕紂王の暴虐をいさめたため囚禁さる

一たび嘗めて延齡の良薬と賞し、

二度なめて心を擾すの媒とおどろき、

三度なめて國家を失ふの基と悟れり。

勞(勞)なく憂なき時飲むべからず。

などがあります。

戦国時代の武将・上杉謙信(1530-78)は剃髪し不識庵謙信と号しました。義侠に富み、兵略に長じた謙信の辞世の偈⁴⁵⁾を次に掲げます。

四十九年 一睡の夢 一期の栄華 一盃の酒

江戸時代前期の儒者・教育者・本草学者の貝原益軒(1630-1714)は、『養生訓』を著し、酒について説いています⁴⁶⁾。

酒は天の美禄なり。少のめば陽気を助け、血気をやはらげ、食気をめぐらし、愁を去り、興を発して、甚人に益あり。多くのめば、又よく人を害する事、酒に過たる物なし。水火の人をたすけて、又よく人に災あるが如し。邵堯夫の詩に、美酒ヲ飲テ教シメテ微酔後、といへるは、酒を飲の妙を得たりと、時珍いへり。少のみ、少酔へるは、酒の禍なく、酒中の趣を得て楽しみ多し。酒を多くのんで、飯をすくなく食う人は、命短かし。かくのごとく多くのめば、天の美禄を以、却て身をほろぼす也。かなしむべし、
(巻第四 44)

益軒は養生訓を実践し、享年85歳の長寿を全うしました。辞世の歌を次に掲げます。

越し方は一夜ばかりの心地して

八十路あまりの夢を見しかな

酒のおいしさは次の過程をへて、「百薬の長」から「万病の元」への道に連れ去ることもあります。くれぐれも、ご用心。

酒は憂いの玉箒 千金春宵一刻飲み

近松門左衛門 女夫池^四

わしとお前は諸白手樽 中のよいのは人知らぬ

山家鳥虫歌 360

世の中はさてもせわしき酒の爛ちろりの袴きたりぬいだり

大田南畝

齋粥またたかせけり二日酔い

洗石⁴⁷⁾

11. まとめ

感性に訴える「酒のおいしさ」は、次の三点の重なったところに最も効果を発揮するのではないのでしょうか。

- 1) ものつくりの人の心 — 次に三冊の本をあげます。

「古代の日本の酒造り」のしくみを実験的に解明した、上田誠之助著『日本酒の起源』⁴⁸⁾

広島酒の名声と三津杜氏の養成に大きな功績を挙げた『吟醸酒を創った男—「百試千改」の記録』⁴⁹⁾にみる三浦仙三郎氏

小野三郎氏は鉄鋼マンとし『ビジネスのさむらい』⁵⁰⁾(日経BP)を遺し、さわやかに人生を駆け抜けました

- 2) あじわう人の心 — 良寛、橘曙覧にみる

- 3) 理性による克己心 — 芭蕉にみる

などの相互作用によるものといえます。

現代の酒仙、青木正児氏の『酒の肴・抱樽酒話』⁵¹⁾、そして沓掛良彦氏の『讃酒詩話』⁵²⁾などを手元において、酒を味わうと酒は一段とおいしくなります。

文 献

- 1) 新村 出：広辞苑，第五版，岩波書店，東京，p.324 (1998)
- 2) 中西 進：万葉集—全訳注原文付(4)，講談社，東京，7刷，p.49 (1992)
- 3) 佐佐木信綱編：新訂 新訓 万葉集 下巻，岩波文庫，東京，63刷，p.181(1987)
- 4) 服部四郎：日本語の系統，岩波文庫，東京，p.1-437 (1999)
- 5) 大野 晋：日本語以前，岩波新書，東京，p.1-251 (1987)
- 6) 大野 晋：日本語の起源 新版，岩波新書，東京，p.1-251，日本語とタミル語の対応語一覧，p.1-20 (1994)
- 7) 大野 晋：弥生文明と南インド，岩波書店，東京，p.1-334 (2004)
- 8) 二宮陸雄：古事記の真実 — 神代編の梵語解，愛育社，東京，p.1-589 (2004)
- 9) 倉野憲司校注：古事記，岩波文庫，東京，40刷 (1989)
- 10) 岡田英弘：倭国 — 東アジア世界の中で —，中央公論社，東京，p.1-220 (1977)
- 11) 岡田英弘：倭国の時代，朝日新聞社，東京，p.1-356 (1994)
- 12) 上田正昭：藤原不比等，朝日新聞社，東京，4刷 (1990)
- 13) 江上波夫，上田正昭，佐伯有漬 監修：古代史事典，大和書房，東京，p.264-265 (1993)

- 14) 山田孝雄校注：櫻史，講談社学術文庫，東京，p.19-24 (1990)
- 15) 江村北海著，西沢道寛訳注：日本詩史，岩波文庫，東京，p.21, p.139, 4刷 (2005)
- 16) 坂本太郎，家永三郎，井上光貞，大野 晋：日本書紀（一），岩波文庫，東京，5刷 (1997)
- 17) 渡部昇一：日本語のこころ，WAC BUNKO，ワック（株），東京，p.224 (2003)
- 18) 石原道博 編訳：新訂 魏志倭人伝 他三篇，岩波書店，東京，45刷，p.48-49 (1986)
- 19) 吉野 裕：風土記，東洋文庫，中央公論社，東京，p.21 (1977)
- 20) 関根真隆：奈良朝食生活の研究，吉川弘文館，東京，p.264 (1989)
- 21) 宮城 文：^{カンミシ}喃神酒，日本醸造協会誌 71, 29-31 (1976)
- 22) 坂口謹一郎：坂口謹一郎 酒学集成 1. 岩波書店，東京，p.94 (1997)
- 23) 樋口清之：食物と日本人，日本人の歴史 第二巻. 講談社，東京，p.99-100 (1986)
- 24) 都甲 潔：感性の起源，中公新書，中央公論社，東京 (2004)
- 25) 山本 隆：美味の構造 なぜ「おいしい」のか，講談社選書メチエ，講談社，東京 (2001)
- 26) 山本 隆：「おいしい」となぜ食べすぎるのか，PHP新書，東京，p.1-235 (2004)
- 27) 田中潔：アルコール長寿法ー晩酌のすすめー，共立出版，東京，(1985)
- 28) 楠見千鶴子：酒の神 デイオニユソス，講談社学術文庫，東京，p.1-318 (2003)
- 29) 井波律子：酒池肉林，講談社学術文庫，東京 (2003)
- 30) 加藤繁 訳注：史記平準書 漢書食貨志，岩波文庫，東京，3刷，p.217 (1996)
- 31) 青木正児：中華飲酒詩選，筑摩書房，東京，9刷 (1987)
- 32) 一島英治：万葉集にみる食の文化，裳華房，東京 (1993)
- 33) 一島英治：万葉集にみる酒の文化，裳華房，東京 (1993)
- 34) 一島英治：古典に見る酒のはなし. 日本醸造協会誌 90, 923-934 (1995)
- 35) 江上波夫他監修：日本古代史事典，大和書房，東京 (1993)
- 36) 佐佐木信綱編：新訂 新訓 万葉集 上巻，岩波文庫，東京，69刷，p.338-350 (1987)
- 37) 中村俊定 校注：芭蕉紀行文集 付 嵯峨日記，岩波文庫，東京，43刷，p.81, p.127 (2004)
- 38) 幸田露伴：芭蕉入門. 新潮文庫，東京，4刷 (1994)
- 39) 復本一郎：俳人名言集. 朝日新聞社，東京，p.31, p.133 (1989)
- 40) 吉野秀雄：良寛 歌と生涯. 筑摩書房，東京，10刷 (1989)
- 41) 大島花東，原田勘平 訳注：良寛詩集. 岩波文庫，東京，16刷 (1992)
- 42) 中野孝次：良寛 心のうた. 講談社+α文庫，東京，p.67-70 (2002)
- 43) 水島直文・橋本政宣 編注：橘曙覧全歌集. 岩波文庫，東京，1刷 (1999)
- 44) 柳沢淇園著，森 洗三校注：雲萍雑誌. 岩波文庫，東京，8刷，p.76-77 (1997)
- 45) 赤瀬川原平監修：辞世のことば，講談社，東京 (1992)
- 46) 伊藤友信訳：養生訓. 講談社，東京，7刷 (1987)
- 47) 柴田宵曲：古句を観る. 岩波文庫，東京，10刷，(1994)
- 48) 上田誠之助：日本酒の起源. 八坂書房，東京，p.1-184 (1999)
- 49) 池田明子：吟醸酒を創った男ー「百試千改」の記録. 時事通信社，東京，p.1-201 (2001)
- 50) 小野三郎氏：ビジネスのさむらい，日経BP，日本経済新聞社，東京 (2004)
- 51) 青木正児：酒の肴・抱樽酒話. 岩波文庫，東京，p.1-238 (1989)
- 52) 杏掛良彦：讃酒詩話. 岩波書店，東京，p.1-282 (1998)

<著者紹介>

一島 英治 (いちしま えいじ) 氏 略歴

昭和9年(1934) 富山県に生まれ、東京で育つ

昭和32年(1957) 東京農工大学農学部農芸化学卒業

昭和32年(1957) 野田醤油(現キッコーマン)(株)入社

昭和44年(1969) 東京農工大学農学部助教授

昭和50年(1975) 東京農工大学農学部教授

昭和62年(1987) 東北大学農学部教授

平成9年(1997) 創価大学工学部教授、東北大学名誉教授、東京農工大学名誉教授

平成16年(2004) 創価大学工学部特任教授

学位：農学博士(昭和42年(1967) 東京大学)

専門：酵素化学・酵素工学

著書：『酵素の化学』(朝倉書店, 1995), 『酵素』(東海大学出版会, 2001), 『酵素は生きている—産業酵素へのいざない』(裳華房, 1995), 『発酵食品への招待 新版』(裳華房, 2002), 『万葉集にみる食の文化』(裳華房, 1993), 『万葉集にみる酒の文化』(裳華房, 1993), "HANDBOOK of Proteolytic Enzymes", Second Edition, Barrett, A.J. *et al.* eds., pp.92-99, pp.131-143, pp.294-296, pp.784-786 (分担執筆), ELSEVIER ACADEMIC PRESS (2004),

趣味：歴史、古典

